

K. マンハイムの知識社会学の成立過程に関する研究 (Ⅱ)

『保守主義的思考』をめぐって

兵庫教育大学 杉尾 宏

マンハイムは、『知識社会学』(1931年)において、知識社会学には「知識の存在拘束性の教説を樹立せんとする」理論としての知識社会学と、「過去及び現在の諸々の知識内容についてその存在拘束性を明らかにする」知識の歴史社会学的研究とがあることを明らかにした。彼は、「現段階の知識社会学にとって最も重要な問題は、事実の歴史社会学の探求の領域において」、「確実な方法によって、具体的材料について具体的な研究を試みること」であるとした。『保守主義的思考；ドイツにおける政治的・歴史的思考の生成についての社会学的考察』(1927年)は、まさにこの知識の歴史社会学的研究(R. K. マートンはこの知識社会学の領域を「実質的知識社会学」と呼んでいる)に当たるものである。『保守主義的思考』は、それまで彼が構築してきた理論としての知識社会学の歴史的知識への適用版である。その意味で『保守主義的思考』は、彼がそれまで構築してきた理論としての知識社会学の実質を明らかにするうえで好資料となる。

マンハイムのそれまでの理論としての知識社会学の展開をここで簡単にレビューしてみよう。彼は、『世界観解釈』(1921-22年)において、現象学という志向性(Intentionalität)の次元の違いから「客観的解釈Objektive Interpretation」、「表出的解釈Ausdrucksinterpretation」、「ドキュメント的解釈Dokumentinterpretation」を区別し、とりわけ「意味の深き理解」を可能なものにするものとして、「ドキュメント的解釈」の必要性を強調した。ドキュメント的解釈は、個々の精神的・心的現象(および内容)の背後に存在している本質的な全体(Totalität)ないし構造(Struktur)の追求と、その全体・構造からの個々の精神的・心的現象の解釈である。様々な精神的・心的現象に本質的な一定の構造があるものとして、その構造から様々な精神

的・心的現象を明らかにしようとした点で意義がある。しかし、ドキュメント的解釈の具体的方法については明示されず、ただ全体・構造をドキュメントしていると思われる様々な精神的・心的表示物の収集と、その表示物からの直観に基づく全体・構造の把握が述べられているだけである。さらに、ドキュメント的解釈は全体(構造)と部分(個々の精神的・心的現象)との再帰的關係が前提となっていたため、その具体的な方法手続きは曖昧なものとなってしまった。

『歴史主義』(1924年)においては、マンハイムは、カントの超時間的、超社会的な認識主観を斥け、「一切の歴史的認識は歴史哲学的(社会学的)立場に制約される」という、歴史的認識における立場制約性(Standortsgebundenheit)のテーゼを打ち出した。しかし、彼が歴史的認識における立場制約性について語るとき、「未来を意欲し、未来に積極的に働きかける主体」が前提となっていたことを忘れてはならない。つまり、そこには未来の形成に向けて積極的に現在を生きる主体による、意欲(Wollen)と関心(Interesse)によって導かれた、立場の選択という主体性の契機が内包していた。「意欲」概念は、後にマンハイム知識社会学にとって重要な概念となる。『歴史主義』においても一つ見逃せないことがある。それは、マンハイムが一定の歴史哲学的立場に一定の「発展」概念が対応することを明らかにするとともに、一定の階層が対応することを示唆したことである。例えば、歴史学派および生の哲学の発展概念は「心的」発展であり、実証主義の発展概念は「進歩的」発展であり、ヘーゲル学派およびマルクス主義の発展概念は「弁証法的」発展であることを示すとともに、それぞれの発展概念の担い手として、貴族・地主層からなる保守層、産業的中産階層(ブルジョア)、産業プロレタリアート

が対応していたことを示唆している。しかしながら、歴史哲学的立場（すでに一定の体系をなしている）と発展概念および階層との関係を明らかにする方法論は展開していない。

『知識社会学の問題』（1925年）においては、存在（Sein）と思考（Denken）との関係が論究されている。マンハイムは、思考を「究極的な対象構成の領域die Sphäre der letzten Gegenstandskonstitution」とみなさず、存在内部の部分的現象として、すなわち存在の表現、機能、発露とみなした。したがって、思考は対象構成に関する認識主体の立場を問うものではない。マンハイムはこのことについて「精神的立場というものは思考そのものとは別のところにある。」と述べている。マンハイムは、思考ないしその産物である知識を歴史哲学的立場から把握することの困難性を自覚し、思考・知識と存在との機能的関係を通して逆に歴史哲学的立場を確定しようとしたものと思われる。マンハイムは、思考・知識の存在に基づく外在的把握から思考・知識の「イデオロギー暴露Ideologieenthüllung」が可能であるとした。『知識社会学の問題』において始めて思考・知識のイデオロギー性の自覚が明確となったといえよう。その際、マンハイムは、存在概念について次ぎの二点を指摘している。第一点目は、存在は、生活主体にとって最もRealitätのある領域、すなわち「中心的に経験される存在領域」＝「生の中心Lebenszentrum」であるということ。中世における存在は宗教であったが、近代以降の存在は社会・経済領域であるとマンハイムは述べている。第二点目は、第一点目と関わって、存在は「意味Sinn」と区別されるものではなくそれ自体意味連関（Sinnszusammenhang）であるとしたこと。マンハイムは、実証主義、新カント主義、現象学批判を通して、存在と意味との二元論を克服しようとした。マンハイムは、『知識社会学の問題』では、知識の存在拘束性については語っておらず、知識を存在次元に置くこと、存在次元からみれば知識はその機能であること、を述べたに過ぎない。しかも知識と存在との機能的関係についても明確にされていない。なによりも存

在がいったい具体的には何を指すのか明確でない。

『精神的なもののイデオロギー的解釈と社会学的解釈』（1926年）においては、解釈論が展開される。マンハイムは、これまでの様々な解釈論を整理し、解釈には、＜内在的な観察Innenbetrachtung＞に基づく解釈と＜外在的な観察Außenbetrachtung＞に基づく解釈があることを明らかにした。前者は精神的なものをその内部から解釈するものであり、＜イデオロギッシュ＞な解釈である。この解釈に基づけば、精神的なものは＜イデー＞として現れるという。ドキュメント的解釈も前者に属するものとして批判されている。後者の解釈は「意味的な存在全体sinnvolle Seinstotalität」から精神的なものの構造全体を解釈するものである。意味疎遠な物質化された存在からの解釈は、本来解釈とはいえず、

「因果的説明Kausalerklärung」とされた。後者の解釈こそ社会学的解釈といわれるものである。この解釈に基づけば、精神的なものの構造は＜イデオロギー＞として現れてくるという。

本発表では、『保守主義的思考』において、理論としての知識社会学がいかに具体化されたかを検討したい。その際、「思考様式Denkstil」と「根本意欲Grundintention」に着目することにする。思考様式は歴史的に形成され歴史的に変化する動的客観的構造である。伝統主義と区別される保守主義的思考様式がどのように理念型として構成されるのか、保守主義的思考様式の特質が現実の歴史的状況（19世紀前半のドイツ）のなかでどのように析出されるのかをまずみることにする。次に、保守主義的思考を支える根本意欲が当時の政治経済的状況（権力関係、階層関係）の中でどのように形成されたのか、マンハイムの考察を検討し、「根本意欲」概念が一定の思考様式の担い手の存在と彼らの思考様式とを媒介する戦略的な概念となっていることを明らかにする。この作業を通してこそ、マンハイムが存在を意味連関であるとしたことの意味が理解できるであろう。また歴史哲学的立場の「主体性の契機」が理解できよう。ここでも存在拘束性について言及されていない。このことは注目されねばならない。